



Title	人間が人間になること,すべてこれが肝心なのだ : ドイツ民主共和国においてディースターヴェクはいかに受け継がれているか
Author(s)	ハンス, レムケ
Citation	北海道大學教育學部紀要, 31, 115-120
Issue Date	1978-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29176
Type	bulletin (article)
File Information	31_P115-120.pdf



[Instructions for use](#)

人間が人間になること、すべてこれが肝心なのだ

—— ドイツ民主共和国においてディースターヴェクは
いかに受け継がれているか ——

ハンス・レムケ

Dass der Mensch zum Menschen werde, darauf kommt alles an
Gedanken zur Diesterweg-Rezeption in der DDR

Hans LEMKE

人間のヒューマニスティックな教育という構想は、フリードリヒ・アドルフ・ヴィルヘルム・ディースターヴェクの仕事を赤い糸のように貫ぬいており、そしてこれが我々に時折り強い印象を与える。例えば、1848年-1849年のブルジョア民主主義革命の敗北後に、彼が書いた論文「現在のすべての教師に何を期待し、また何を要求すべきか」のなかに、我々は彼の教育家としての行動の原理を見出したが、この原理は今日にいたるまでその基本的な意義を失うことはなかった¹⁾。周知のようにディースターヴェクは、1790年に生まれ、1866年に歿したが、疑いもなくドイツ市民社会におけるもっとも功績あり、かつ国際的にもっとも強い影響力を及ぼした教育学者であった。この時期にドイツ市民社会は、その発展の進歩的な局面にあって、歴史的には古臭くなってしまった封建制に対する闘争において、人類の進歩という旗を掲げている。

後のルール地方から遠からぬ、当時すでに資本主義が著しく発展していた、ラインラント-ヴェストファレンの一地方でディースターヴェクは成長した。この時代はまた、ドイツにおける諸関係が、国民的な独立の獲得とナポレオンによる外国支配のくびきからの解放という力の作用を受けていた時期であったが、青年ディースターヴェクは数学を勉強した後に測量技師の職を選ばないで、教師になる決心をした。このような時代の一般的な作用と並んで、彼がその生命を国民の教育と陶冶に献げるに至った最後の衝撃を与えたのは、解放の年1813年に彼が、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッツィの精神に従って活動していた、フランクフルト・アム・マインのある模範学校に滞在していたことであった。

ドイツ民主共和国政府が、「功績ある国民の教師」という称号とともに、卓越した教育者に毎年授与するメダルは、フリードリヒ・アドルフ・ヴィルヘルム・ディースターヴェクの肖像で飾られている。これは教育関係における最高の勲章である。数多くの学校やその他の教育施設が——またベルリン・フムボルト大学教育学部も——彼の名前を称し、かつそれにふさわしい義務を負っている。ドイツ民主共和国は彼の歿後100年を記念して国際シンポジウムを開き、また20冊を越えると考えられる彼の「全集」を初めて刊行し始めたことによって、ディースターヴェクの不滅の事業に対する尊敬の念を表した。なおこの全集のうち今日まで半分以上が出版されている。しかしながらただこのような外面上なことだけが、ドイツ民主共和国に

おけるディースターヴェクに対する尊敬の特徴をなしているわけではない。

文化的遺産はただに祝祭日のためのものだけではない。そうではなくてこの遺産が社会主義社会において現実に、社会主義的な学校の日常の教育に継受されていることが、本質的なことである。これを目指しているのが、1976年5月の第9回大会において採択されたドイツ社会主義統一党の新綱領である。そこでは次のように言われている。

「ドイツ民主共和国の社会主義文化は、ドイツ国民の全歴史のなかで創られた豊富な遺産のおかげを蒙っている。あらゆる偉大なものと高貴なもの、またヒューマンスティクなもの、革命的なものとは、ドイツ民主共和国においては、それらが現在の課題と生きた関わりを持つことによつて、尊敬をもって守られている。」²⁾

ディースターヴェクの仕事も、この文化的遺産の実体をなしている。その多くの要素に対して、我々は彼とは異なった社会的、科学的な立場を基礎として、批判的に対処しなければならないが、しかしそれによって彼の仕事は傷けられはしない。

ディースターヴェクのヒューマンスティクな教育上の関心や彼の将来を指し示す教育学的思想は、ドイツ民主共和国における社会主義的学校にとって、精神的な遺産であり、またその遂行はこれらの学校に委ねられている。彼はくり返し人間の生来の創造力や人間が自分をとりまく具体的な歴史的環境に依存していることについて、基本的な問いを投げかけた。彼の教育学的理論における「自然適応性」と「文化適応性」の理論は、その基礎が観念論的であることによつて傷けられることなく、社会主義的教育がそこに結合し得る拠点を、明瞭につくり出したのであった。この点をディースターヴェクは、青年の公教育にかんする一論文のなかで、次のように確認した。

「子供たちは等しく生れている。個人個人の相異は、無限の多様性となって現れる。しかしいかなる教育学者も発生上の相違を、両親の身分や財産や職業の相違によつて証明することはできなかった。教育の影響さえも、確認されないのである。

自然から与えられた等しい素質を発展させるという課題を、社会は引受けている。社会は未成年者の現世における将来を慮り、そしてその活動を通じて未成年者に対して、成年者の理性的かつ幸福な生活と結びつく諸条件を作り出すのである。」³⁾

「神の摂理」を唱える聖職者や封建的官憲国家の弁護者たちに反対して、ディースターヴェクは教育者の使命を次の言葉で定義した。

「人間の教育者は、子供たちの全面的人間的な素質や彼らの発展の法則および手段を問題とするのであって、彼らが何になろうと、そのことには全く気遣わない。教育者はただ善きことのみを、知っている。」⁴⁾

人間の全面的な教育の必要性、そのために自然の諸条件やまた社会的な諸条件を備える必要があるという主張の論理的な帰結として、ディースターヴェクは国民のすべての子供たちのための、統一的な国民学校を要求するに至った。この国民学校には、「人間の学ぶすべてのものを、人間は生活のためにこそ学ぶべきであり、そして人間の学んだすべては人間の生活において利用され、かつ役立たせらるべきものである」⁵⁾という原則が、刻みつけられねばならぬとされた。この「現実的な」目標に基いて設立される学校を、ロベルト・アルトは、我が国の社会主義的な全面教育的多方面合技術高等学校の先駆者だと名付けている。すなわちアルトによれば、それは実科学校の一つのタイプであつて、「我が学校制度への発展における必然的な、他のものでは置き換えられない鎖の環をなしている。……そこで——これらの学校において

——生産における活動や社会体制を協同して形成することや、また文化的生活と国家的生活への参加などと関連する教育が目指されている限りにおいて、実科学学校のこのタイプは、発展の鎖の環を表現している。なおこの教育は、なにかんづく自然科学および母国語による伝統を学ぶことによって、実現さるべきものである。さらにこの学校が我が国の学校の先駆者であると言うのは、そこにおいて、人間のすべての面を發展させ、それらを調和させ、そして人間の社会的生活、個人的生活の形成に当つてこのすべての面を活動させるべき教育を、この学校が指向しているからである。』⁸⁾

当初からディースターヴェクの関心は、数学および自然科学に置かれていた。すでに1817年に彼の博士論文「世界の没落に関するドクトル・W・Hゼーレ氏の理論に対する率直な反論と世界の没落について、ならびに地球の歴史に関わるその他の所見」において、彼は聖書から導き出された世界没落の予言を、自然科学の視点からすれば、維持し得べからざる宗教的な思弁だと形容したが、このことによってディースターヴェクは自らが、ドイツ哲学に対するフランスにおける古典的ブルジョア革命の作用に最も精通していた、ドイツ啓蒙思想の代表者であることを示したのであった。科学の優位のために、ディースターヴェクは「宗教は科学と協調すべきであって、その逆ではない。もし信仰が知識と一致しないならば、信仰が道を譲らねばならぬ。その逆ではない。』⁹⁾と述べた。

ディースターヴェクの努力は、その最も深い内面において、19世紀に開花した自然科学と結びついていた。なにかんづく彼は、自然科学上の諸認識を教育の仕事のために、思想的な選鋳をするという点において、教育界における彼のあらゆる戦友たちを凌いだ。「すべての学校教師は自然の精通者たれ」という彼の要求を、ディースターヴェクは次の原則と結びつけた。すなわち「国民が意識するにいたるいかなる自然法則も、背理に対する理性の戦いにおける一つの勝利を意味する。』⁹⁾自然科学上の原則を学校に应用することは、ディースターヴェクにおいては、とりわけ彼の「通俗天文学」において明瞭に現れている。この著書は、普通教育において天文学の授業が行わるべきだと指示していたが、この天文学の授業はずっと後になって、我が国の社会主義的学校制度の諸条件の下において始めて、このような地位を占めることとなった。彼の「教授学小教科書」のなかで、ディースターヴェクは天文学なる教科の必要性を、次の言葉によって擁護した。

「この必要性を認めない者に対して、私は次の質問を呈する。人間がこのような知識を欠いた解釈を、……世界観を持つだろうか、と。あるいは我々は次のように質ねる、天文学の知識を欠いている者は、人間であろうか、と。そして我々はこう回答せねばならぬ、そうした人間は人間ではなく、けものと同様に、制限を受けた生物である。すなわちこの生物は狭い生活圏に封じこめられ、ただ一度もその正当な地位と生得の感受性、眼を用いることを学ばなかったし、そしてその認識能力は極めて狭い範囲に止まって、それを越えて拡大することなく、自然の人間には生れながらに備わっている知識欲を満足させなかった。この生物はその思考力を發展させもしなかった。……もし人間の教育に天にかんする知識が欠けるならば、いかなる種類の人間教育であれ、そこには本質的な部分が欠けている。』⁹⁾

ディースターヴェクの自然科学に対する態度は、ブルジョア教育史学においてはほんの僅かしか知られていないか、あるいは知られぬままにとどまっている。そのことをパウル・ホプが実証している¹⁰⁾。資本主義社会は、すべての生徒に無制限に知識を伝えることには、興味を持たなかったし、また今日もそうである。なぜかと言えば、この無制限の知識の伝達から、

ブルジョアの階級支配の維持にとってのある危険が生ずるからである。これに反して宗教は、この支配の維持に貢献する。社会主義社会は、授業における科学性の原則を厳守することによつて、自らがディースターヴェクの傳統を純粹に守り、かつ發展させていることを示している。

授業の対象に関しても、またその教授法に関わっても、授業の科学性を主張したディースターヴェクは、これと並んでさらに、教えることと学ぶことの関係、教育者の指導と子供たちの自主的活動との関係を、授業の本質をなすものと考えた。この関係は、教師の活動が生徒の活動を活力あるものにすべきだ、という考えによって規定されていた。なぜならば、彼によれば、子どもが生き生きと活動することなしには、子どもが何ものかを獲得することはあり得ないからである¹¹⁾。市民社会の古典は人間の本質をこのように規定し、ディースターヴェクはこれを「何びとも人間でありたいと思ひ、人間として生きたいと思ふ。すなわち活動的でありたいと欲する」¹²⁾という言葉で表現したが、彼はこれによって授業活動において「人間の諸力に刺激を与え、これを發展させること」を目標とした。このようにカール・ハインツ・ギュンターは結論を述べている¹³⁾。ディースターヴェクは時折り、「形式的」陶冶と能力の發展を「物質的」陶冶と素材の媒介の上に置いた、と言われていた。しかしながら国民のすべての子供たちのために教育上の財産を根本的に改良しようという彼の多様な努力や、その当時存在したユンカーや教会の力に従う詰め込みドリル学校に対する彼の決定的な批判は、むしろ次のことを証明する。能力と知識を發展させるに當つて、また実践的能力と理論的な洞察を發展させる際に、精確に評価を受けた状況が必要だ、と彼が考えていたことである。

ディースターヴェクはその後もよい授業の特色として、科学的な教育と道徳的な陶冶の統一を教え上げた。「すべての眞の授業は、精神の体操であり、生活および性格の形成である」¹⁴⁾と後は強調した。正しい洞察と正しい行動とはまた連動しているという、ディースターヴェクを理解するには、ある機械論的な特色が見出されるにしても、それにも拘らず彼は教師の思考を、今日に至るまで重要な核心的問題に向けたのであった。「ディースターヴェクが提起しているように、道徳的陶冶の中心を授業に置くということは、今日にいたるまで正当である。このことは、授業における学習が、教育および陶冶の過程に於て成長しつつある子供たちの最も本質的な活動形態だ、という事実に根拠を持っている」¹⁵⁾とカール・ハインツ・ギュンターは正当にも強調する。社会主義社会においてはそれは必然的に、多様な、授業以外の活動や校外の活動によって補完される。このような活動はまた、言葉と行為の統一、社会的に有用な思考と行動の統一、そして社会主義的な意志と行動の統一を生徒がつくり出すことを目指している。

ディースターヴェクは、プロイセン邦の封建的教権的反動勢力が彼にいやがらせをして、彼をベルリンの市立師範学校校長の職から遠ざけるまでの、ほとんど30年間教師の養成者として活動した。この仕事に従っている間のディースターヴェクは、我々に対して豊富な、そして確かにいまだに完全には汲み尽されていない遺産を残してくれた。教師の社会的な名望を高め、物質的な状態を改善することに、ディースターヴェクは絶えず関心を持った。彼は倦むことなく教師協会の創設のために戦ったが、この協会はドイツの教師たちの自主的な利益代表機関となるべきものであった。「教師に価値があれば、まさにそれだけ多くの価値を学校は持つ。それ故に教師の教育を向上させることが、いかなる学校改革にとつても、その第一歩をなす」¹⁶⁾とディースターヴェクは1865年に述べた。この言葉は幾分かは、後の世代への遺言として述べられたものである。ドイツ民主共和国は、この社会主義社会は、彼の遺言に完璧に従ってきた。

ディースターヴェクに対する政治的陰謀は、周知のように1847年における彼の罷免で終わったが、そのために結局のところまた、ディースターヴェクはベルリン大学にかわりたいと意図したことが実現しなかったのである。彼は次のように書いた、「実際のところこの移行は極めて自然なものであった。私は教師であったし、そしてそれで幸福であったかぎりには教師であり続けた。教育科学において私が得た諸経験をさらに広めるために、望ましい地盤が現れたと思われた。」¹⁷⁾ しかしディースターヴェクはただに科学に基礎をおいた教育学の発展の可能性を、大学に見出したばかりでなく、またそこに教育の機能をも、国民の最高の教育機関の持つ、人間教育の効果の必然性をも見たのである。1835年に書かれた彼の「文明にとつての死活問題」なる論文には、「ドイツ大学の腐敗について」という長い節がある。この中で彼は、科学を発展させ、教授することと同時に、また若い人々を教育し、陶冶することが大学の使命だ、という要求を提示した。

ドイツ諸大学の代表者たちはこの要請に対して、ディースターヴェクの人格を侮辱し、誹謗することによつて答えた。彼らは彼を教師仕事をする「靴職人」として、注文によって仕事をする手工業者組合の一員として取扱った¹⁸⁾。そこでディースターヴェクは大学から閉め出さるべきものだ、とされた。その当時科学に従って行動した者は、また実践と密接に結びついた近代的な教師教育を見ようと思った者は、ベルリンでは大学を訪ねるべきではなかった。そうではなくて、その場所をオラニエンブルク通りに探し求めねばならなかった。ここではディースターヴェクが自ら述べたところによれば、しばしば1ヶ月に60人もの外国からの来訪者を、その師範学校と訓練学校において指導したのであった。このオラニエンブルク通りではベルリン大学の学生たちもまた学習に参加できた。この通りにあった学習のための建物は、遺憾乍ら第二次世界戦争中に破壊された。

ディースターヴェクは社会の革命的発展の道を信奉しなかったし、また1848年-1849年の革命の年々における諸事件からも遠ざかっていた。確かに彼は、彼の構想する学校制度がただ理性的かつ人間的な社会的諸条件の下においてのみ貫徹されるということ、たとえここに至る道筋が彼には明瞭でなく、そして労働者階級の科学的世界観も彼には知られないままであったとは言え、知っていたのであった。フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベルに献げた言葉のなかで、ディースターヴェクはよりよい世界——じつにこのよりよい世界のために今日なお諸国民が戦っており、そしてこの戦いのなかにドイツ民主共和国は自らが固く組み込まれていることを自覚している——に対する彼の希望を、次のように表現した。「いつかは……人々が剣を本当に鎌に変えるであろうような時代が来るであろう。すなわち現在は数百万の人々が戦争に利用され、戦争の機械として用いられる時代であるが、やがて次のような時代が来るであろう、すなわちその時代においてはすべて数百万の人々が、人間のための人間の教育を促進するという使命を与えられるのである。」¹⁹⁾

(上杉重二郎訳, übersetzt von Jujiro Uesugi)

註

- 1) A. Diesterweg: Schriften und Reden in zwei Bänden. Ausgewählt und eingeleitet von H. Dieters, Volk und Wissen Verlag, Berlin/Leipzig 1950, Bd. II, S. 387.
- 2) Programm der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands. Dietz Verlag, Berlin 1976, S. 52.
- 3) A. Diesterweg: Schriften und Reden....., a. a. O., Bd. II, S. 520 f.
- 4) F. A. W. Diesterweg: Sämtliche Werke. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1969, Bd. X, S. 383.

- 5) Ebenda, Berlin 1957, Bd. II, S. 12.
- 6) Diesterweg und wir. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1967, S.73 u. 78.
- 7) A. Diesterweg: Pädagogisches Jahrbuch 1858. S. 275.
- 8) Rheinische Blätter. Neue Folge, 1853, Bd. 47, S. 170.
- 9) A. Diesterweg: Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer und andere didaktische Schriften. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1962, S. 311 f.
- 10) Diesterweg und wir. A. a. O., S. 79 f.
- 11) F. A. W. Diesterweg: Sämtliche Werke. A. a. O., Berlin 1964, Bd. VII, S. 339.
- 12) A. Diesterweg: Schriften und Reden....., a. a. O., Bd. II, S. 385.
- 13) Diesterweg und wir. A. a. O., S. 144.
- 14) F. A. W. Diesterweg: Sämtliche Werke. A. a. O., Berlin 1964, Bd. VII, S. 79.
- 15) Diesterweg und wir. A. a. O., S. 141.
- 16) Nach: Geschichte der Erziehung. Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin 1966, 7. verbesserte Auflage, S. 286.
- 17) Diesterweg und wir. A. a. O., S. 141.
- 18) A. Diesterweg: Pädagogisches Wollen und Sollen. Leipzig 1857, S. 53.
- 19) A. Diesterweg: Wegweiser zur Bildung für deutsche Lehrer....., a. a. O., s. 54.